

中古天台教學において、恵心檀那兩流口傳法門の特色ある教義の内、教相論として三種法華説と四重興廢との二つの形式が重要視されていることは、既に諸師先學の指摘するところである。¹⁾

そこで本論では、特に三種法華諸説に注目し、中古天台における多種雑多な展開をみたこの教義について、多少の整理分析と、それに基づく検討考察を報告するものである。

1

先ず、三種法華説の成立については、傳教大師撰『守護國界章』に、

彈曰。麤食者。擧テ十種ヲ。勸ニ進ス衆生。善哉善哉。但執ニ法華一分。謗ニ法華全文。又憑ニ法華教未開隱密、一分功德。降ニ法華教已開顯説全分功德。夫於一佛乘者。根本法華教。分別説三者。隱密法華教。唯一佛乘者。

顯説法華教。妙法華之外。更無ニ一句經。唯一乘之外。更無ニ餘乘等。隨ニ機有ニ千名。隨ニ根有ニ淺深。諸有智者。善思ヲ念之。一代經教。莫レ執ニ優劣。 (傳全二、一七一)

とある。これが三種法華説の起源根據とされるものである。『守護國界章』に初めて登場した、根本法華・隱密法華・顯説法華という三種法華説が、以後中古天台の諸師により様々に展開していったのである。ただし、傳教大師がこのような教義を説示する背景は、法相宗徳一の三時教判に對する反駁によるものであり、且つ三論宗嘉祥吉藏の三法輪判の影響を受けて成立したものとされている。ともかく、傳教大師の説示した三種法華が基本となることは、諸師先學皆な異論はないようである。²⁾

問題は、傳教大師以後、果たして誰が、觀心主義的あるいは絶待的教判論に展開していったのか、ということになるだろうし、また「三種法華」という名言用語も何時ごろ成立したのかも明らかでない、ということである。

先學の研究を参照すると、傳教大師は、三種法華の内容こそ説いたが、「三種法華」という名言用語は用いていないことは明らかである。但し、例えば、中古天台の偽撰とされる『修禪寺決』には、「諸佛ノ内證二本ト自リ五時ヲ具ス。全ク機情ニ趣カズ。是ヲ自證法華ノ體ト名ク。智威師ハ。三種ノ法華ヲ立ツ。第三ノ根本法華ハ。五時ニ在リテ立ツ。即チ是佛意ノ五時ナリ。機情ノ五時ハ。常途ノ説ノ如シ。」(傳全五、一二九)と見えているけれども、親撰とされる文献には、『守護國界章』以外には見られない。また、慈覺大師圓仁・智證大師圓珍・五大院安然・慈慧大師良源・恵心僧都源信など、およそ平安朝末期までの祖師先徳の信頼できる文献には、三種法華説は見られないのである。³⁾

このことは、まさに三種法華説が、中古天台において扱われるべき重要テーマであり、しかも種々複雑雑多にして、後説するように、あるいは五時教判と關連して、あるいは密教との融合をみて胎金兩部や印明と結びつき、あ

るいは灌頂と結びつき、重授戒灌頂戒儀の中に取り込まれたりする。さらにこれらの所説が、後に検討するように、東密系の流派の印信中に取り込まれたり、日蓮宗系の文獻にまで影響を與えている事に驚くと共に、この三種法華説について、再検討する意義もここにあると考える。

2

中古天台における三種法華説の様々な展開は、既に先學の提示するところであるが、假りに「起源」「展開」「別説」と大きく分類して、その代表的な出典根據と合わせて、以下のように整理してみた。

「起源」傳教大師説（『守護國界章』（傳全二、一七一））

根本法華・隱密法華・顯說法華

「起源」南岳所立説（『法華略義聞書』（佛全十六、一〇四上）・『天台名匠口決抄』（佛全十八、二八六上））

佛惠法華・開顯法華・内證法華

「起源」惠威所立説（『法華略義聞書』（佛全十六、九一下））

本住法華・自證法華・轉變法華

「起源」智威所立説（『法華略義見聞』（佛全十六、二下～三上））

轉變法華・本住法華・自證法華

轉變——爾前・迹門

本住——俗諦三千萬法自體常住

自證——本迹未分

3

「展開」五時判（『法華輝臨遊風談』（佛全十四、三四〇上～下））

根本法華——華嚴

隱密法華——阿含
方等
般若

顯說法華——第五時

「展開」五時判（『法華文句要義聞書』（佛全十六、一五四上～下））

根本法華——華嚴（非華嚴經）

隱密法華——前四味

顯說法華——法華經

「展開」四重興廢（『法華略義見聞』（佛全十六、四一下））

隱密法華——爾前大教

顯說法華——迹門大教

本門大教

根本法華——觀心大教

「展開」三大部（『摩訶止觀見聞添註』（佛全二九、一四上））

隱密法華——玄義（釋名等）

顯說法華——文句（四種釋）

4

根本法華——止觀（天真獨朗內證）

〔展開〕四種法華（『一代決疑集』）（日光天海藏寫本）

根本法華——華嚴經——十地論等

隱密法華——中間三昧——大師所說四教義淨名疏等

顯說法華——本迹兩門——玄與文釋本迹法華

內證不可說法華——止觀——內證法華

〔展開〕三種合掌（『相傳法門抄』）（日光天海藏寫本）

根本法華——堅實合掌——權實不二

隱密法華——未敷蓮華合掌（虛心合掌）——未開會

顯說法華——開敷蓮華合掌（八葉）——開權顯實

〔展開〕胎金兩部・無作祕印（『相傳法門抄』、『溪嵐拾葉集』（大正藏七六、六〇三中）下）

根本法華——胎金不二——堅實合掌 胎 〔根本法華——本有性德一點不具——堅實合掌 胎 胎寂〕

隱密法華——胎藏界——虛心合掌 胎 〔隱密法華——始覺修德緣起諸法——虛心合掌 胎 金照〕

顯說法華——金剛界——八 葉 胎 〔顯說法華——修性不二法界具蓮——八 葉 胎 寂照俱時〕

〔展開〕御持經（『相傳法門抄』）

根本法華——南無開三顯一開權顯遠心佛衆生一乘妙法蓮華經

隱密法華——南無佛

顯說法華——南無妙法蓮華經

〔展開〕一心三觀（『天台名匠口決抄』（佛全十八、二八五上））

根本法華——一心三觀（山家無・慈覺說・智證無）

隱密法華——一心三觀（山家無・慈覺說・智證說）

顯說法華——一心三觀（山家說・慈覺說・智證說）

〔展開〕開權顯實（『天台名匠口決抄』（佛全十八、二八五下））

根本法華——法體法爾

隱密法華——顯實（實即權）

顯說法華——開權顯實（權即實）

〔展開〕七重二諦本迹（『天台名匠口決抄』（佛全十八、二八六上））

隱密法華（本迹）——前六重二諦——真諦——本・俗諦——迹

根本法華（本迹）——只點一法二諦宛然

顯說法華（本迹）——第七二諦

〔展開〕三經典（『天台相傳祕決鈔』（『續天全』口決1、五三三上）下）

根本法華——心經（『天台名匠口決抄』（佛全十八、二八五下））

隱密法華——阿彌陀經（『北谷祕典』「鐵檄書」身延山藏寫本）

顯說法華——法華經

〔別說〕三種法華經（『天台宗圖』（『續天全』口決1、一五四上））

迹門重——法師品迄

本門重——涌出品已下
本迹兩重——寶塔・提婆・勸持・安樂品

「別説」四種法華（『法華略義聞書』（佛全十六、一〇七下））

内證法華——譬喻蓮華
不變眞如一理當體蓮華
法法塵塵各具當體蓮華
自證不可得蓮華

「別説」五種法華（『法華略義聞書』（佛全十六、一〇八下））

内證（自證）法華——從權入證
從迹入内證
從本人内證
本住自證不可得
自證還施小化證

「別説」七種法華（『法華文句要義聞書』（佛全十六、一四二下））

一代圖教——詮佛心見權即妙法華（隱密法華）
當機得入法華（不待時（爾前））
開權顯實法華（迹門圓）
本覺無作法華（本門圓）

本迹未分法華（獨一不思議圖）
所觀一心法華
佛意法華

以上のように、二十項目に分類してみた。その他にも、例えば『根本法華經見聞』（三千院藏寫本）のように、單獨であるけれども三種法華説を踏まえた上での文獻などもあるが、ここでは省略した。

この分類の中でも、「起源」恵威所立説と「起源」智威所立説とは、単にその順序次第が異なっているだけのように見られる項目もある。ともかく、三種法華説の基本用語としては、第一に、「起源」傳教大師説の根本・隱密・顯説の三種法華。第二に、「起源」南岳所立説の佛惠・開顯・内證法華の三種法華。第三に、「起源」恵威所立説の本住・自證・轉變法華、および「起源」智威所立説の轉變・本住・自證の三種法華である。この三種の名言が、三種法華説の基点となって、以後の展開をみるようである。ただその最も基本となるのは、「起源」根本・隱密・顯説の三種法華であることは言うまでもない。

3

それでは、先に整理してみたところを考慮しつつ、恵心檀那兩流の三種法華説の展開を見てみることにする。

先ず、恵心流においては、心賀法印（一二四三〜一三〇〇）を中心として考察してみることにはしたい。心賀を中心とすることは、その口傳相傳書が伝えられていることや、後世多方面へ及ぼした影響、或は關東天台との關係からも、最も適していると考えからである。

心賀の相承系譜は、例えば、定珍篇『日本大師先徳名匠記』によれば、梶生流相承次第として、「源信 覺超

勝範 長豪 忠尋 皇覺 範源 俊範 靜明 心賀（以下略）」（佛全一一、二八三）となり、恵心流の正嫡である。その恵心相生流の嫡流である心賀の諸論は、多数の文獻に援用引用されているが、本論では、心賀談尊海相傳一海記『二帖抄』と『相傳法門抄』⁽⁴⁾（『八帖抄』）を中心とし、またその關聯している末註等をもつて検討してみる。

先ず、『二帖抄』上「境一心三諦智一心三觀事」には、

尋云。山家大師一心三諦境一心三觀智等文委細料簡如何口傳耶。（中略）

長講法華經。仰云。法華經宣說一切衆生皆本覺無作三身也定也。今法華經三種法華共可有之。（中略）

尋云。三種法華相如何。山家釋云。於一佛乘者根本法華經也。分別說三者隱密法華經也。唯有一乘者顯說法華也。妙法之外更無一句餘經矣（天全九、一二六上、下）

とあり、また同じく『二帖抄』「法華深義」には、

尋云。三種法華習如何。守護章釋云。於一佛乘者根本法華也。分別說三者隱密法華也。唯有一乘者顯說法華也。妙法之外更無一句餘經文（天全九、一三八下）

とある。『二帖抄』においては、『守護國界章』を引くのみで、特に内容があるわけではない。このことは、後の尊舜類聚『二帖抄見聞』には、次のように説明されている。すなわち、「二條抄には三種法華の名字ばかりを擧げて、くわしくその相貌を分別せず。一海法印は、八帖抄にはくわしく三種の名相を分別して印眞言等を出すなり。」と説明されているのである。これからも解るように、元より心賀『二帖抄』では、『守護國界章』より展開したものは明示していないし、詳しくは『八帖抄』（『相傳法門抄』）に一海が印眞言など註記しているとされるのである。先ずこの問題から見てみることにする。

今は未刊の『相傳法門抄』（『八帖抄』）であるけれども、日光天海藏寫本など諸寫本を、管見し得たところを紹介してみることしよう。

先ず、『相傳法門抄』第四の「法花深義帖」を見てみる。

尋云。三種法花相如何釋耶。

守護章上釋云。於一佛乘者。根本法花教也。分別說三者。隱密法花也。唯有一乘者。顯說法花也。妙法之外更無一句經矣。

尋云。三種法花共法花深義可云歟如何。

口傳仰云。妙法之外更無一句經故非「法花深義」法不可有之。然此云事顯說法花第五時法花顯後可云也云云。口傳仰云。三種法花合掌印不同以「法花深義」口傳深旨子細有之如彼云云

ここでは、『二帖抄』と同じく『守護國界章』を示すが、「顯說ノ法花第五時ノ法花顯ハレテ後」とあり、既に五時教判との關係が纒に見られ、しかも「三種法花ノ合掌ノ印ノ不同」ということも示されていることが注目され、子細は別にあると言っているのである。このことは、尊舜『二帖抄見聞』で指摘されているが、内容は説明されていない。以下『相傳法門抄』で詳しく説明されているところを、紹介提示しておくことにする。

一。三種法花事

山家大師御釋云。於一佛乘者。根本法花教。分別說三。隱密法花教。唯有一乘。顯說法花教。妙法之外更無一句經矣

南無開三顯一開權顯遠心佛衆生一乘妙法蓮花經。根本法花

南無佛。隱密法花

南無妙法蓮花經。顯說法花

身 一印 法界道場

口 一名號 法界聲塵 以風爲本

意 一心三觀 法界心性 天真獨朗爲體

尋云。三種法花以合掌一印相承口傳如何。

口傳云。深祕也。根本法花堅實合掌印也。權實不二全無別體相也。次隱密法花未敷蓮花合掌印也。虚心合掌。未開會相也。次顯說法花開敷蓮花合掌印也。八葉是開權顯實相也。依之譬喻品。踊躍歡喜即起合掌經文。疏五釋云。敍解儀者。即起合掌名身領解。昔權實爲二如掌不合。今解權即實如一。二掌合一矣。合掌一印始根本法花。是內證隱密顯說一代五時法門。權實不二十界互具深祕。即身成佛奧旨。以此一印顯之云云

先ず、「三種法花事」として一項目を立て、「守護國界章」の三種法華を明示し、次に「南無佛」等の三種法華を示し、次に身口意に展開し、三種合掌に關係付けしたところを以て、簡潔に纏めている。

次いで、今の文について、長文の説明が示されているが、繁雑であるので以下「尋云」部分のみを擧げてみる。

- ・尋云。山家大師御誕生時。本尊持經捧手誕生給云事有之歟如何
- ・尋云。南無佛三字皆成佛道被云事如何
- ・尋云。分別說三隱密法花事如何
- ・尋云。只名號法界聲塵以風爲體云事如何
- ・尋云。以天台宗諸宗中持國利民宗守王法最頂也云事如何

とあり、さらに續けて、

一傳云。慈覺御傳。根本法花。本有不變。印堅實合掌。明日胎寂

隱密法花。緣起諸法。印虚心合掌。明日金照

顯說法花。不二法性法界皆蓮。印八葉。明日寂照俱時

私云。此事相構相構能可尋之也

とある。ここでは、慈覺御傳として、或は「慈覺大師御入唐記」とか「慈覺大師續入唐記」と言われるものを指すか、三種法華・三種合掌・印明等が結合説示されている。

因みに「私云」は、等海『宗大事口傳抄』（天全九、四八二下）では、「一海云」となっており、『宗大事口傳抄』が『相傳法門抄』を依用援用している一つの證據となるだろう。

さらに、『相傳法門抄』では續けて、

尋云。祖師中誰人三種法花對人奉授事有云事

仰云。上東門院長豪。嘉陽門院俊範云云

とある。この記載は『宗大事口傳抄』には無く、尊舜『二帖抄見聞』中に粗同文が見られる。また、記家の大家である黒谷光宗が記録する『溪嵐拾葉集』にも、

一偈書云。師示云。俗人若女身授此云書授也。題名唱後可授之也。

上東門院長豪 嘉陽門院俊範 大宮女院靜明 已上被奉授之云云（大正藏七六、六〇三中）

とあって、上東門院（藤原彰子、萬壽三年（一〇二六）院號宣下）には長豪（一〇七五～一〇七七）。嘉陽門院（禮子内親王、建保二年（一一二四）院號宣下）には俊範（一一八七～一二五九）。大宮女院（藤原結子、

寶治二年（一二四八）院號宣下）には靜明（一二四四）一二八六）が、それぞれ三種法華を授けたようである。この記事中の三院と三師との関係は不明であるが、年代的には矛盾しない。

次に、『相傳法門抄』は續けて、

尋云。此流無作祕印云事有_レ之歟。何様云事耶
口傳仰云。自身無作_レ三身故六塵六作擧手動足悉無作_レ印也。一身一印無作_レ四威儀也。一口無始_レ息命風也。一意本有心性也

根本法花。胎金不二寂照同時。印堅實合掌。明日_レ本有清淨阿字也

隱密法花。胎藏寂因曼陀羅。印虚心合掌。明日_レ妄想顛倒阿字也

顯說法花。金剛界照果曼陀羅。印八葉。明日_レ

とあり、先の慈覺御傳と重複するような内容であるが、無作祕印に約して、身口意三業と胎金兩部印明と三種法華を集成しているのである。さらに心賀は俊範御義として、密教の以字燒字と顯說法華の關係にまで言及している。

尋云。顯說法花對_レ字_レ心如何

俊範法印御義云。以_レ字_レ燒字云習祕教有_レ之也。於_レ字_レ妄想顛倒阿字。修德性徳阿字有_レ之。凡夫所具阿字妄想顛倒阿字也。字_レ風爲_レ體。風大因不可得法也。火生長_レ風ヲハナレテ生長事無_レ之。而本有清淨智惠。妄想顛倒中隱有_レ之處。字_レ風妄想顛倒阿字ヲヤキテ本有清淨阿字顯也。故顯說法花對也。天台大師於_レ大蘇法花道場_レ三昧開發_レ一乘悟解シタマヒシ事。藥王品。是名眞法供養如來文起。此即一乘智火煩惱妄想ヲヤキステ本有清淨本覺内證顯燒身供養法門顯密全無_レ不同_レ云云。祕教所_レ談_レ一字三句法門可_レ思_レ之云云

以上により、『相傳法門抄』における三種法華諸説の粗全体が概略できたと思うが、ここで注意されることは、心賀の所説には、忠尋撰號を持つ一連の文獻で見られた、「起源」南岳所立説・「起源」惠威所立説・「起源」智威所立説等に全く觸れられていないかのようであり、これがまた大きな問題点となってくる。忠尋撰とされる文獻は、中古天台口傳法門の重要書とされるが、惠心相生流の嫡流を繼ぐ心賀が、全く感知していないかの如くであることは、忠尋撰號を持つ文獻成立とも何かしら關係があるのかも知れない。

4

次に、檀那流系統の關係について、概略見てみることにする。

先ず、尊舜『摩訶止觀見聞』中には、

慧光院相傳云。以_レ三經_レ爲_レ三種法華。心經根本法華。小阿彌陀經陰密法華。八軸妙經顯說法華。然時又心經摩訶全_レ同止觀_レ也。（佛全二九、三三下）

とあり、先に見た「展開」三經典（『天台相傳祕決鈔』・『天台名匠口決抄』・『北谷祕典』・『鐵檄書』（身延山藏寫本））と同じ内容のものが示されている。或は同じく『摩訶止觀見聞添註』には「惠光院澄豪師具義云」

（佛全二九、三四上）として、三經典に配當した説が見られる。しかし既に、尊舜以前の明辨注『天台相傳祕決鈔』にて、「惠光院傳云」と言われている。『天台名匠口決抄』では、「惠心先徳事相三種法華相傳時」とあつて、惠心流に關係するが如くに説かれていたことは注意が必要だろう。しかも、更に詳しく纏まった文獻を現在見出せないのである。今後、澄豪・永弁など、およそ檀那流の主要諸師の文獻を調査する必要があるだろう。

そこで本論では、檀那黒谷流の戒家に相傳されたところを見てみる。先ず戒灌頂戒儀中に見られるところを示し、

次に戒灌頂の重書である興圓草『圓戒十六帖』を見てみることにする。

先ず戒灌頂戒儀の『戒灌授法』には、

次授印。先合掌印。合掌以敬心。十界一念。生佛一如。萬法不出。合掌印。天地未分時如鷄子。衆生在胎時以胞衣包之。亦合掌也。草木生芽時合掌也。

次三種法華印。先堅實合掌。於一佛乘者。根本法華經也。次未敷蓮華。分別說三者。隱密法華經也。次八葉印。唯一乘者。顯說法華經也（續天全圖戒1、一〇上）

とある。これは元應寺流戒儀書の部分であるが、「授印」の合掌印、次に「三種法華の印」が示されており、堅實合掌 於一佛乘 根本法華經。未敷蓮華 分別說三 隱密法華經。八葉印 唯一乘 顯說法華經と關係付けられ、戒灌頂の戒儀次第の中に見られることは、多方面に現われた影響の一義として、特に注意すべきところである。次に、戒家の大家である傳信和尚興圓草『圓戒十六帖』を見てみる。

祕訣云。又有三種合掌。如受法訣。追可註之云云 示云。

問。三種合掌者其相貌如何 答

予相承此祕訣。一度披見如向明鏡。再無待口決。先師後再不委說。只此書得掌中之上。悦喜滿胸無上寶聚不求自得之思サテ止了。先師閉眼以後見此書。有此文。迷惑失方角。問決無據。師誰可問明。悲歎無甲斐。所謂戒法祕印口決只當流之己證。一人相承之法門也。嗚呼當此時法輪停轉斷佛種。最後斷種殃。損自損他。歎中歎悲中悲何事過之耶。但再案之慈覺大師祕口決有三種合掌印。以之可口決也。是則最極祕事也云云

問。其印相如何 答

此事山門一流大事。戒法至極之祕事也。其故顯密一致大事故也。依之慈覺大師口決云

於一佛乘者 根本法花教也 堅實合掌印

分別說三者 陰密法花教也 未敷蓮花印

唯一乘者 顯說法花教也 開敷蓮華印

口傳云。堅實合掌者諸法實相一印也。圓宗鎮主大黒天神根本印者堅實合掌印也。仍一印習合祕曲也。慈覺大師御釋中道者天部也云云（中略）

示云。以三種法花三印云事隨分祕事也。慈覺大師御釋云。先師於淨土院此口決相承于予文。戒家意以合掌印一大事祕藏也。其說所爲說實相印合掌一心待等也。此常出所據也。只深密以題名習祕藏也。蓮花者合掌故也。依餘祕義兩字裏薄墨合掌注付口決也

三印共境智冥合之義也。堅實合掌者。境智印。境智冥合本來之義也。未敷蓮花者。境智少開演動義也。開敷蓮花者。合散無妨不二冥合印也。是正開演義也。（中略）

仍三種合掌者三種法花印也。自本戒家相承置傍依經事以三種法花之意立依經故也。此三世諸佛教法掌内納祕藏大事也。生死一大事此印明故也。祕中祕不可口外。可祕。可祕

正和五年（一一三一六）極月二十一日書之 佛子興圓

正慶元年（一一三三二）壬申七月二十八日書寫之 佛子光宗（續天全圖戒1、一〇二下〜五上）

先ず、三種合掌について、興圓（一一三三〜一三三七）は、この祕訣を先師（惠顛）より相承したけれども、先師の滅後遺つてその内容に迷惑し、その祕印を慈覺大師祕口決の三種合掌印に求めたとされ、その印相は山門一流の大事、戒法至極の祕事、顯密一致の大事と評され、それは、於一佛乘者。根本法華教也。堅實合掌印。分別說三

者。陰密法華教也。未敷蓮華印。唯一乘者。顯說法華教也。開敷蓮華印の三種合掌が示されて、一代の諸經が法華に集約され、妙法の蓮華が合掌に表され、三印合掌が境智冥合の三種の義を顯しているものであり、まさに三種法華をもって三印ということは、隨分の祕事であり、戒家の意は、合掌印をもって一大事と祕藏するところであるとされている。但し、興圓の弟子惠鎮（一一八一―一三五六）は、先師の祕訣はこの三種合掌のことではなく、實は三重合掌のことを指すのではないかと注記されている。それはともかく、三種法華と合掌印とが、檀那流系統の黒谷戒家の流れの中に確認出来ることは、注目すべき点であろう。但し、明辨『天台相傳祕決鈔』や尊舜『摩訶止觀見聞』中に記された、慧光院澄豪説としての心經・阿彌陀經等の三經典と三種法華を結合した説が、本書には見られない。これもまた、三種法華の展開を見る上で、重要な問題点となると思われる。

5

次に、心賀・興圓共に密教との関係からの展開が、慈覺大師相傳に託つて示されるところがあつた。ここでは、密教との関係を探つてみることにする。更に、日蓮宗系統への展開影響についても検討考察してみる。

先ず、前に見たように、三種法華と胎金兩部や印明などの關連付けは、惠心檀那兩流に見られたが、實に東密系にまで及んでいることが注目されるのである。

東密三十六流の一つで、佛種房心覺（一一一七―一一八〇）を祖とする常喜院流に相傳される印信に、三種法華が見られるのである。この流派は、廣澤根本六流分派以前、大御室性信親王の下にて分かれた觀音院流祖寬意の法系とされ、流祖心覺は、もと台密寺門園城寺の学僧であつたと言われる。特に智證大師系統の流れであることは、大變興味深い。

先ず、常喜院流覺阿淨空相承印信四十七通（『東密諸法流印信類聚』第九卷四七六―五三一頁）を見てみる。「常喜院流目錄」の内、第二十法華大事と第三十五法華大事との二通がある。内容を見てみる。

三種法華大事 常 二十 二紙一裏
三種法華大事 常
法華大事

印 大日法身塔婆印 無所不至印

明 對野觀音勢 以上口決在別

授與 傳燈大阿闍梨心鏡

已上一紙

凡付^ニ法華^一有^ニ三種法華云事。所謂根本法花隱密法華顯說法華也。先根本法華者。天真獨朗證智圓明不^レ分^ニ機法^一天地不^レ開所根本法花云也。隱密法華者。佛出世本懷雖^レ爲^レ說^ニ法華^一衆生機根未熟之間。四味三乘教説給事法華^レ内證隱密説給故。隱密法華云也。顯說法華者。今妙法花經八ヶ年説是也。抑此一乘法華者。諸佛出世本懷衆生成佛直道^{トシテ}諸經中王也。爰以受持讀誦解説書寫五種法師現得^ニ六根清淨^一果^{トシテ}當來成佛無^レ疑云云。此三種法花能觀念心得世間衆生何事漏^レ法華修行^一者無^レ之文

印口傳 對文表

裏付 淨空私云。此口決纔^ニ只淺略法花也。無^レ一語及^ニ深祕法花^一者

已上一紙

已上二紙一裏

これが第二十の法華大事である。第三十五についても、ほぼ同文同内容で、裏付「淨空私云」と「未敷蓮云」とが、あるかないかの相違だけである。この印信については、その成立を窺わせる年代等の記述がない。假に、こ

の四十七通中の第四十五「五重」の奥書を参照してみると、

五重 常喜院 四十五 一紙一裏（奥書）

承久二年庚辰（一二二〇）八月十九日傳之了

康元二年（一二五七）正月二日書寫傳受了 已上本記

建徳三年（一三七二）正月廿一日書寫傳受了 照海

嘉慶二年戊辰（一三八八）六月廿二日奉授果海上人了

應永二十年（一四一三）八月廿二日 照海

延享四丁卯（一七四三）八月十五日 授與 淨空

昭和四己巳（一九二九）十月三十日 授與 傳燈大阿遮梨大僧正心鏡 已上一紙一裏

とあつて、承久二年に傳了、康元二年に書寫傳受とある。しかし、ここには傳受者や書寫者が明記されていない。また「已上本記」ということも明瞭でなく、建徳三年照海傳受邊りが、或は成立年時と推測出来はしないだろうか。また、この奥書が「法華大事」印信にも、當てはまるかどうかとも判然としないのである。

ただいずれにせよ、東密系の常喜院流に相傳される印信類の中に、内容も「根本法華とは、天真獨朗證智圓明として機法とも分たず、天地も開けざるところを根本法華というなり。」と説くように、正に中古天台で展開した三種法華説が援用採用されている。しかも「起源」傳教大師説の根本・隱密・顯説の三種法華を基本に、最後に印口傳として「對と表」と慈覺相傳とされる「展開」胎金兩部・無作祕印との關連も想起される點は、大變に興味深い印信である。これが若し、天台内部からではなく、常喜院流のような外部からの影響で、逆に天台内で起源基本の三種法華と、印明・合掌といった事相とが結び付いたとも考えられるが、現段階では確實な證據は見出せない。

6

次に、三種法華説は日蓮宗系統にも影響展開している。關係するところを見てみる。

先ず、日蓮聖人には多數の眞撰が現存、あるいは曾存しているけれども、三種法華説に言及しているところが見られない。しかし、次に提示するものには、明らかに三種法華、或は三種合掌にも言及しているのである。

先ず、『眞言見聞』（系年文永九年（一二七一））には、

仁王經も羅什の所譯には印眞言無_レ之。不空所譯之經には副_レ之。知ン又是譯者意樂也。其上法華經には爲説實相印と説て合掌の印有_レ之。（昭和定本『日蓮聖人遺文』第一卷、六五四頁）

とあり、「合掌の印」の語が見られる。しかし、三種法華説に關係する用語は見當たらぬ。

次に、『御義口傳』上「譬喩品九箇大事」（系年弘安元年（一二七八））には、

第二即起合掌事 文句五云敍_二外儀_一者即起合掌名_二身領解_一昔權實爲_二一如_レ掌不_レ合今解_二權即實_一。如_二二掌合_一向佛者昔權非_二佛因_一實非_二佛果_一今解_二權即實_一成_二大圓因_一因必趣_二果故言_二合掌向佛_一矣。御義口傳云合掌者法華經異名也。向佛者奉_レ值_二法華經_一云也。合掌色法也。向佛心法也。色心二法_二妙法開悟_一歡喜踊躍説也。於_二合掌_一又二意有_レ之。合者妙也掌者法也。又云合者妙法蓮華經也掌者二十八品也。又云合者九界掌者佛界也。九界權佛界實也。妙樂大師云九界爲_レ權佛界爲_レ實矣。十界悉合掌二字納森羅三千諸法莫_レ非_二合掌_一也。惣三種法華合掌有_レ之。今妙法蓮華經三種法華未分也。雖爾先顯説法華爲_二正意_一也。依_レ之傳教大師於一佛乘者根本法華教也。妙法之外更無_二一句餘經矣。

（昭和定本『日蓮聖人遺文』第三卷、二六二―三頁）

とあり、ここでは譬喩品の「即起合掌」について、まず『法華文句』五を引用し、「御義口傳」として、特に「惣じて三種法華の合掌これ有り」と三種法華およびその合掌という用語が言明されていることに注意が必要であらう。次に、『具騰本種正法實義本迹勝劣正傳（百六箇抄）』（系年弘安三年（一一八〇））には、

二十三、下種三種法華本迹、二種迹、一種本也。迹門隱密法華、本門根本法華、迹本文底、南無妙法蓮華經顯說法華也。（昭和新定『日蓮大聖人御書』第三卷、二七一頁）

とあり、ここでは、特徴ある三種法華が提示されている。つまり、迹門 隱密法華。本門 根本法華。迹本文底 南無妙法蓮華經 顯說法華という三種法華説は、この文献の成立流傳と大いに関係があるように思われる。

次に、『法華本門宗要鈔』上（系年弘安五年（一一八二））には、

惠心釋曰已今當妙與法華妙同味曰據謗法罪永不出地獄云云。謹勸十宗大都皆迷一代聖教未知名根本法華之元意。故復無知三種法華。未知名法華經超過於諸經上。

（昭和定本『日蓮聖人遺文』第三卷、二一五頁）

とあり、「根本法華之元意」とか「三種法華」という用語が使用されている。同じく『法華本門宗要鈔』下には、

而無作本有久遠實相本門五百塵點劫實相。迹門三千塵點劫爾前今日顯說法華實相。法爾天然元意實相。天真獨朗果滿實相。全於實相體即無勝劣。（昭和定本『日蓮聖人遺文』第三卷、二一六頁）

とあり、顯說法華の用語が使われている。

次に、『萬法一如鈔』（系年不詳）には、

夫華嚴は根本法華と云も蓮の花のさかへたるが如し。未成菓。華嚴根本の花つばみたりとも、其花さかずして其ままならば無用也。（昭和定本『日蓮聖人遺文』第三卷、二一九七頁）

とあり、華嚴 根本法華の関係について、觸れられている。

次に、『日大直兼台當問答記』には、

尋云、此妙法蓮華經ト云ハ三種ノ法華ノ中ヘハ何ゾ耶、
直兼云、顯說法華ノ義云云、（『日蓮宗宗學全書』第二卷、四二八頁）

とあり、坂本大和尚圓實坊法印權大僧都直兼と住本寺本覺法印日大（一三〇九〜一三六九）との問答が見られる。

ここで「尋云」つまり日大が既に三種法華の用語を用いていることは注意が必要で、日大以前には、何かの形で三種法華説が、日大に傳聞されていたことになる。更に、

日大尋云、去去年本門釋迦造立云云、印契八教主脇士等合掌ヲ皆造立ス云云如何、
直兼云、尤モ可然、其故ハ、儀軌云、十指合掌印、諸印之爲母云云、總シテ法華ハ一部始終合掌文、三種法華ノ時、根本法華ハ堅實合掌、（二掌堅ク合）虚心合掌（十指合少シ不合）隱密法華、開敷蓮華合掌、（指ヲ皆開テ左右ノ手ヲ合）顯說法華等也。爾者十指堅實合掌尤モ叶道理也。文五云、有爾前權實相隔、如不合二掌、法華體權即實、如二掌合、爾者無相違云云、

直兼云、眞言三身種子ノ義、（以下略）（『日蓮宗宗學全書』第二卷、四三一頁）
とある。ここでは、根本法華 堅實合掌、隱密法華 虚心合掌、顯說法華 開敷蓮華合掌が、直兼の説として記録されている。

次に、『三種法華問書』には、貞治五年（一一三六）に面授されたところを詳細に記録している。
・三種法華事（「展開」御持經と同じ）

根本法華——南無開三顯一開權顯遠心佛衆生一乘妙法蓮華經

隱密法華——南無佛

顯說法華——南無妙法蓮華經

相傳聞書云、慈覺大師續入唐記・・

・三種法華大事 三種法華口傳

根本法華本有不變印合掌堅印 明曰(梵字略)

隱密法華證起諸法印虛心合掌 明曰(梵字略)

顯說法華不二法華經法界皆印八葉 明曰(梵字略)

・法華四要付四海領掌大事

方便品 智拳印 (梵字略)

安樂行品 無所不至印 (梵字略)

壽量品 外五古印 (梵字略)

普門品 引導印 私云佛眼印 (梵字略)

・三種法華口傳 (以下の本文は、光宗『溪嵐拾葉集』「三種法華事」に相似している)

・血脈事 靜明——尊海——寬海——傳海

心賀——心聰

・一偈文裏云 上東門院 長豪、嘉陽門院 俊範、大如院 靜明

・三種法華 裏書 覺大師御傳(『日蓮宗宗學全書』第二卷、四三七〜四四四頁)

以上が『三種法華聞書』の概要である。本書は、貞治五年の相傳聞書であることは奥書識語により明瞭だが、誰が誰に相傳したのかは不明である。明記はないが、住本寺日大の相傳か。内容は、正に惠心流心賀の『相傳法門抄』

や黒谷光宗集『溪嵐拾葉集』で提示する三種法華説とはほぼ同内容となっている。これが、關東天台からの相傳であるのか、または比叡山京都相承なのかも確定できないが、最後に記されている奥書には、

于時永徳二年(一一三二)壬戌五月二日於洛陽土御門猪熊本覺寺

貫首日顛上人相承 雖後後末代不見之可弟子一人付囑 授與者矢野式部阿闍梨 生年六十五歳 日英判

とあり、或は比叡山京都系からの相傳かとも思われるが、明確ではない。

ともかく、日蓮宗系統の文獻にも、少なからず三種法華説が影響を與えていることは、確認できるのである。しかも、日蓮聖人眞撰あるいはそれに近い撰述には、三種法華説は全く見られないのに、多少疑義ある文獻では、自家藥籠中のものとして、依用援用して説示されている點は、注意が必要であろう。

7

中古天台口傳法門文獻は、膨大な數量であるが、例えば、『本理大綱集』『枕雙紙』『天台法華宗牛頭法門要纂』『眞如觀』など比較的初期成立の文獻には、三種法華説は見当たらない。今纔に管見出来得た文獻を、おおよそ人師や識語等の年代順に列記して、先の諸説番號を注記し、整理したところを呈示しておく。

「三種法華」關係一覽

最澄(七六六〜八二二)

『守護國界章』弘仁九年(八一八)成立

『修禪寺決』? (智威所立説・自證法華・根本法華・五時判)

『三大章疏七面相承口決』? (顯說法華のみ)

『法華肝要略注秀句集』？——（根本・隱密）（轉變法華のみ）

良源（九一二～九八五）

『一代決疑集』？——

忠尋（一〇六五～一一三八）

『法華略義見聞』？——

『法華略義聞書』？——（相似）

『法華文句要義聞書』大治元年（一一二六）？——

『漢光類聚』大治三年（一一二八）？——（三種法華の用語なし）

心覺（一一一七～一一八〇）

『常喜院作目錄』嘉元元年（一一三〇三）写本？

『三種法華大事印信』？——

俊範（～一一八七～一二五九）

『一帖抄』俊範草 嘉曆四年（一一三二九）心聰注進——（第五時顯說法華）

『大和庄手裏鈔』？——（陰密法華のみ）

日蓮（一一二二～一二八二）

『眞言見聞』？ 文永九年（一二七二）——（合掌印の語）

『御義口傳』伝日興記 弘安元年（一二七八）——

『具騰本種正法實義本迹勝劣正傳』？ 弘安三年（一二八〇）——（相似）

『法華本門宗要鈔』？弘安五年（一二八二）——（根本・顯說法華。三種法華）

『萬法一如鈔』？——（華嚴 根本法華）

靜明（～一二四四～一二八六）

『天台宗圖』？——

政海（一二三一～一二九八）

『天台傳南岳心要抄』——

惟暹（～一二七四～九一）

『窮源盡性抄』第七 永仁元年（一二九三）以前——（合掌）

隆禪（一二六〇～一二九一）

『窮源盡性抄』第一 弘安三年（一二八〇）——（佛惠・開會？）

心賀（一二四三～一三一〇）

『二帖抄』 心賀 延慶三年（一一三〇）——

『相傳法門抄』心賀 延慶三年（一一三〇）以後——（一代五時）

惠顛？

『戒灌授法』？——

興圓（一二六三～一三二七）

『圓戒十六帖』興圓草 正和五年（一一三二六）——

良助（一二六八～一三一八）

『法華輝臨遊風談』？

光宗（一二七六～一三五〇）

『溪嵐拾葉集』光宗 元應元年（一一三一九）

禪海？

『血脈相承私見聞』〔曆應五年（一一三四二）以前（三種法華血脈の項目）

心聰（一三〇九～一三四七）

『藏田抄』心聰談豪海記 貞和三年（一一三四七） （一代五時）

等海（一三一七～一三四九）

『等海口傳抄』等海集 貞和五年（一一三四九）

直兼？

『日大直兼台當問答記』貞治二・三年（一一三六三、四） （眞言三身種子義）

〔日大（一一三〇九～一三六九）か〕？

『三種法華聞書』貞治五年（一一三六六） （法華四要品・四海領掌印）

明辨（一一三一七～一三八一）

『天台相傳秘決鈔』永和二年（一一三七六） （一代五時）

尊舜（一四五一～一五一四）

『二帖抄見聞』明應十年（一一五〇一）

『法華經鷲林拾葉鈔』永正七年（一一五二〇）頃

『摩訶止觀見聞』？

（添註）

以上のように纏めてみると、文獻によって用いられる三種法華説の内容が、ある書では「起源」傳教大師説のみを挙げたり、また特徴ある三種法華説が、ある文獻のみに見られることなど、今後の中古天台文獻研究に、この三種法華説の存在と、どのような三種法華説が採用されているかを検討することも必要な作業と思われる。

無動寺明辨（一一三一七～一三八一）が注する『天台相傳秘決鈔』には、

但世間人人於_二相承_一異本有_レ之。誓海有人被_レ授本。始_レ守護章文終_レ三印有_レ之。又有人相傳_レ本覺大師之相承_一顯密取合ラレタルモ有_レ之。然心聰尊海授マシマス本。尊海了海被_レ授本。承海法印被_レ授本無_レ異途。此本始_レ守護章文終_レ三印文無_レ之。餘文并示言等同_レ之。仍以_二此本_一正相傳本云ヘキ也云云。サテ守護章文私本文引見他人破_二三時教_一下也云云（『續天台宗全書』口決1、五四九上）

とあつて、明辨の時代には、既に三種法華の相傳書に種々異本が存在したことが明記されている。心賀を中心とする相生流の人師が三種法華説を主に相承しているようであるが、他流の事もまた、十分に調査研究する必要がある、早計にこの問題の答えは出せない。

また、忠尋撰號を持つ文獻にのみ多數見られる 南岳・惠威・智威所立説であるが、これは何を意味するのであろうか。一方、三種法華と三種合掌という点から見ると、忠尋撰號を持つ文獻では、合掌には一切觸れられていない。忠尋撰號文獻の成立を考える上でも重要な問題点であろう。合掌や印明との融合は、おおよそ一二〇〇年代後半頃より、明瞭に文獻上に現われてくるが、その成立が、圓密一致・密勝顯劣・圓密戒一致など、その立場によつて各々謀られたように推測されるのである。また特に、文獻書誌研究において、三種法華説の用例があるかどうかを問題として、今後調査検討する方法も可能ではないかと思われるのである。

註

(1) 福田堯穎著『天台學概論』(文一出版刊、復刻中山書房佛書林刊)。

碓慈弘著『日本佛教の開展とその基調』(下)(三省堂刊、復刻、名著普及會刊)。

上杉文秀著『日本天台史』正(復刻、國書刊行會刊)。

田村芳朗著『鎌倉新佛教思想の研究』(平樂寺書店刊)。

『天台本覺論』日本思想大系、新裝版(岩波書店刊)。

澁谷亮泰師『三種法華論』(『山家學報』第十九〜二十一號)。

小島文保氏他共同研究『日本天台口傳法門の研究』(佛教研究所紀要第13集、印佛二三二・二四一)。

例えば、福田堯穎著『天台學概論』(三〇二〜三頁)では、天台密教概説の内、第一章天台密の成立において、密教の後世への影響として、口傳法門についてこの三種法華説を一例として擧げている。また、澁谷亮泰師の『三種法華論』(『山家學報』第十九〜二十一號)は、特に詳細で綿密な研究成果として獨歩の感があり、また、碓慈弘師の『日本佛教の開展とその基調』(下)(一八九〜二〇六頁)は、惠心檀那兩流の教判論として、四重興廢とともに検討が加えられており、本論においても兩師の研究を大いに参考としている。また、『密教大辭典』2、八〇八頁や『望月佛教大辭典』2、一五七八〜九頁においても大變興味ある内容

で纏められているが、これらを参照した研究も見られない。さらに、近年の『續天台宗全書』口決1・圓戒1などを始めとする新出資料には、未だ検討が加えられていない。なお、『續天台宗全書』解題を参照。

(2) 澁谷亮泰師前出論文。田村芳朗著前出書を参照。

(3) 註(1)を参照。

(4) 田村完誓氏「惠心流七箇法門第二重の文獻について」(印佛九一)を参照。

拙稿「惠心流心賀法印談一海記『八帖抄』考」(天台學報第四十號)を参照。

(5) 『二帖抄見聞』下(『天台宗全書』九、二五九頁上)。また、尊舜は、相生流の正嫡争いを記録している。靜明以後の心賀方(心聰後見)と靜範方(惟暹後見)についてであるが、心賀も惟暹もともに三種法華と合掌を説くことから、靜明にも、三種法華と三種合掌とが説示された可能性はある。(同、一六五上〜下)

(6) 日光天海藏本・身延山久遠寺日叡・日守・日學本を使用。註(4)を参照。

(7) 『相傳法門抄』中の三種法華説部分と『宗大事口傳抄』とは、内容的には相似している。但し説明の順序が大いに異なっている。今後兩書の詳細な比較検討が必要である。

(8) 『天台宗全書』九、二六〇頁上。

(9) 以字焼字について、『大日經義釋』(『續天台宗全書』密教1、五四六頁下)を参照。

(10) 例えば、『玄旨壇秘鈔』下(「信仰叢書」、九〇頁下)には、

法華經相承口決 二通之内

塔中相承大總持妙法蓮華經 口傳

口傳云。王家相承直授天台相承有_レ之。其旨一卷書見。又傳教大師持_レ手誕生玉生生世世持經云一相傳

此經也。

尋云。大總持者如何。答。一心一念不_レ生重。生佛未分大總持法位也。是顯_二根本法花内證_一也。とあつたり、「南無佛」の用語が見られたりする。但し明確な三種法華説は見當たらぬ。

或は、『北谷祕典』、『鐵檄書』（身延山藏寫本）には、「展開」三經典について見られるが、成立年代は一三〇〇年以後になるだろう。

(11) 大久保良順師「重授戒灌頂の興起」（天台學報第二十二號）を参照。

色井秀讓著『戒灌頂の入門的研究』（東方出版刊）、「戒灌頂と合掌」（天台學報第二十四號）を参照。また、『續天台宗全書』圓戒1の解題を参照。

(12) 心覺の傳記として、『本朝高僧傳』第十二「紀州高野山沙門心覺傳」（佛全一〇二、二〇二上）を参照。

(13) 後世には、更らに、慶林坊日隆（一三八五〜一四六四）『五帖抄』の要文を抜書している大石寺二十六世日寛（一六六五〜一七二六）の『抜書雑々集』上「尼崎流五帖抄抜書」（興風叢書1、二五〜六）には、「三種法華の事」が記録されている。また、身延山十一世行學院日朝（一四二二〜一五〇〇）の『當家朝口傳』下（興風叢書3、一四一〜三）には、「慧心流相傳」として、三種法華・三種合掌・印明・~~其~~ままでが、詳細に記録されている用例がある。日朝の相傳は、恐らく關東天台仙波系統からのものであるう。